

富士谷御杖著「經緯略辨」について

——世上未知の一書——

龜田 次郎

一

徳川の世、文藝復興後、國語學界には、僧契沖以下數多の學者輩出し、各方面に互つて、漸次、深甚な考察する様になつたが、假名遣以外には、未だ真正の學問の領域に進入つたとはいひ難い状態であつた。然るに、明和の頃になつて、富士谷成章、本居宣長の二大學者が並び出で、其研究を發表してから、茲に斯學は一大發展を遂のである。後者の學説は、其繼承者や學閥の盛大であつたが爲めに、後世、天下の學界を風靡して、今日に及ぶのである。之に反して、前者の研究は、其業績決して後者に劣らざりしにも拘らず、其繼承者や學閥の微少事情の爲めに、後世、餘り學界に影響を與へなかつたのである。最近、學界の進歩に伴ひ學者の研究に依つて、其眞價が認識され、昂上されるに至つたのである。本誌七月號に、佐々木博士が此富士谷成章の嗣子で、而も廿

1
富士谷御杖著「經緯略辨」について（龜田）

の繼承者である御杖の著書二部について高説を述べられたが、今、自分は亦、同人の著述で、而も世上未知未聞の一部を紹介して、聊、鄙見を公にするのである。斯學に涓滴の參考ともならば幸である。

二

自分が、今、茲に紹介する世上未知未聞の著書は、自分の私藏の「經緯略辨」の題名ある一折の圖表である。此書は從來、世に出た傳記や著述書目には少しも見えてゐないのである。而も本書は鑄山紙に記した著者自筆の寫本である。それは樹枝の模様ある雲母引白紙に、茶褐色で二箇の果實を現した表紙の題簽に、

西勝寺 (墨書)

ケ (朱書) 和音 (朱書)

富士谷御杖著手跡 (以上墨書)

關川 (朱印)

經緯略辨

一折 (以上墨書)

十三ノ五 (朱書)

とあり、又裏表紙の左側下部には、青壁稿(?)の朱印陰字が捺されてある。此等は舊藏者の文字、捺印である。然し本文内容の文字は、題簽の示す如く、著者の眞蹟の様である。世上流布の著者筆蹟に酷似してゐるから疑ふ餘地が無い様である。

本書は、上記の如く其題名「經緯略辨」とあるが、此經緯といふのは、著者の父成章の著「脚結抄」に、「たてぬき世にいふ五十韻なり」とある通り五十音の略解である。著者御杖は、最初に、

亡父成章著脚結抄中に經緯辨あるよしを載たれとも草稿なし。凡、これわか御國言の本なれば、積年忘るゝ時なかりき。わか伯父皆川愿讀學に長す。又密宗の僧悉曇に長したるにも、おはく／＼とひけれど、漢土天竺音におきてハ、たかふ事あるましかれと、風土のしからしむる所にや、用ふる所ことにして、和音に叶はす。されは所詮和韻は別に草創するにしかすと、國書をみることに心を用ひたる事久し。ふと思へらく、この五十音、みな口を開きての音也。口を開ての音はより外なし。いまた口を開かざる間の音なれば、大かた五十音は此んより出る音なる事をしりぬ。ん口を開けは、字となる。此事くはしくは予か隨筆にいへり。此故にんは音の源、字は音のはしめなる事をささるべし。大うた和言は、字緯を下にふむを正しとす。たとへはおもふこれ也。おもはぬ、おもひ、おもへ、おもはゆとかふは變化なる也。大かた韻學口中のかたちをもて義をとらむとす。近きか如くにして迂遠なり。予は自然の聲によりて義をしるなり。凡、經はあ經を除きて、九ツ。その九經に、あ、い、う、え、お、五音の緯をかけ、經緯の義をあはせて一音の義をなす也。四十五音みなこれに同じ。あ經をのそくは、のそくにあらす。緯の義、即、あ經の義なれば也。悉曇體文九つに摩多五ツをかけて無をなまは似たれと、和音はこれをもて誦かたき事上にいふかことし。おかのみならず、字をはしめとする事、他域にことなる所謂として、わか御國、もと天地ふたつをそなふること神典の大むねなれば、音もまた經に緯をかけて後はしめて義をなす事やむことをえさる所なりかし。此故に、義をとるには、まつ經の義をとり、さて緯の義をかくへし。緯の義その語の實とはなる也。愿標實をいふ。これ即、經緯は標實なり。二音、三音乃至五音、七音の語も上はみな標下の一音實なりと心うへし。先輩此五十音をとけとも私なり。とるにたらず。その私なりといふ故は、經も一義、緯も一義なるが、ふたつあひて義をなすことをしらされはなり。大かた人の用ふる音五十に過ぎる事明らかなり。國學に在いて此音學はむねとすへき事これにて思ふへし。此妙用あけてときかたし。

と述べてゐる。亡父成章の「經緯辨」の事は、其著「脚結抄」に「經緯圖」として五十音圖を擧げて、今日一般に行と唱へるのを經(たて)といひ、列或は段と稱するのを緯(ぬき)といつて、其下に、

世にたてぬきのことわりをしらぬ人あたてのおもしを、わたてよおき、わたてのをもしを、あたてにわくはあやまれり。師説(成

章) たてぬきの辨あり。

とあるのをいふのである。此を所屬辨は、本居宣長の「字音假字用格」中にも詳論されてゐて、其爲めに、宣長と成章との所説に其先後論があつて後世、學者間に喧しき議論のある所であるが、それは兎に角、此所屬辨について亡父の所説が不明であつたのを、其嗣子で、學説の繼承者たる御杖が、此「經緯略辨」を書いて、其所信を公にした譯である。又此「經緯の辨」については、上記の文中にも見えてゐる如く、御杖は、已に、其先著「北邊隨筆」卷之一に「經緯」と題して詳しく論述してゐるが、此「略辨」は其要旨を述べたのである。尙ん、う、本源説は、後世の學者にも祖述され、殊にう音本源説は、明治中期に於て林瓊臣翁に依て盛んに唱道されたものである。今日の聲音學から見れば、左したるものでもないが、當時は、勿論、近年迄、學者間に祖述唱道された學説であつたのである。次に御杖は經緯圖、即、五十音圖を掲げて各經緯、即、行、段の意義を述べてゐる。其は一行一義説である。今それを下に示す。

あ	い	う	え	わ	コレハ緯ノ祖ニテノコリ九經ニコノ義ヲカケテ四十五音トハナルナリ引聲ニコノ五音ヲモツコソノ證ナリ
か	き	く	け	こ	コレハカタキ物トカタキ物トノアタル聲ナリソレ義トナリテタトヘハ人ト我ト各了簡ノタカヘルカアタルヤウノ義也
さ	し	す	せ	そ	コレハ物ノ上ヲナヅル聲ナリサレハ物ニソヒユク義ナリムカフノカタチナリニソフ義ナリ
た	ち	つ	て	と	コレハ板ノ上ナトヘ指ヲトムル聲ナリサレハ物ニ物ノトマル義アリ
な	に	ぬ	ね	の	コレハ和ラカナル物ヲ握リシメテ指ノ股ヨリアマル聲ナリサレハソトヘアマルホドニ物ヲ持シタル義ナリ

此一行一義の音義説は、或點に於ては、其眞理を認めることは出来ようが、これを國語全般に及して説明することは出来無いのである。然し此一行一義説は、後年、更に進んで一音一義説となり、多くの學者に唱へられる様になつたのは、學風の趨勢とのみ見るより外はないので、何等根據を有せぬものといはねばならぬのである。只、吾々は、過去の先哲諸家の間に、斯る所論があつたといふに止まるのである。最後に、御杖は、

九經のうち、や經とわ經もの、聲の形容すべききは、もとこの二經本故あるへし。思ふにい、う、え、あ、を、など、この二

富士谷御杖著「經緯略辨」について(續三)

一三七七

は	ひ	ふ	へ	ほ	コレハアハセタル手ヲヒラクヤウノ聲ナリサレハモノコト目ニ タツホトノ義也
ま	み	む	め	も	コレハ物ト物トノヨリツクヤウノ聲ナリサレハ二物ヲヨセツクル ヤウノ義ナリ
や	い	ゆ	え	よ	コノ聲ハ物ノ上ニハシラネト義ヲハカルデイフ也コレモ物ノ内ヘ モノ、入リコム聲也サレハ外ナルモノ、物ノ内ヘ入コム義ナリ又 モノ、ウシロヘヤル義アリ
ら	り	る	れ	ろ	コレハ箱ナトノ内ニ物ノ音アル聲ナリサレハ一重ヘタテタルムカ フニアアルモノヲサス義ナリヤ經ニ混スヘカラスヤ經ハ外ヨリ入ル ナリコレハモノトヨリ内ニアルナリ
わ	ゐ	う	ゑ	を	コレハ聲ノ形容スヘキナシ義ヲハカリテイフ也コレハムカフヘユ クモノ、カヘル聲ナリサレハヒトスデナルヘキヲ今一筋ヘ用フ ル義ナリ
あ ノ ヲ テ サ タ テ ル ノ 天 ノ 音 ミ 義 也 コ ノ 聲 ハ 物 ノ 上 ニ ハ シ ラ ネ ト 義 ヲ ハ カ ル デ イ フ 也 コ レ モ 物 ノ 内 ヘ モ ノ 、 ウ シ ロ ヘ ヤ ル 義 ア リ	い ヤ ミ ノ 音 ミ 義 也 コ ノ 聲 ハ 物 ノ 上 ニ ハ シ ラ ネ ト 義 ヲ ハ カ ル デ イ フ 也 コ レ モ 物 ノ 内 ヘ モ ノ 、 ウ シ ロ ヘ ヤ ル 義 ア リ	い ヤ ミ ノ 音 ミ 義 也 コ ノ 聲 ハ 物 ノ 上 ニ ハ シ ラ ネ ト 義 ヲ ハ カ ル デ イ フ 也 コ レ モ 物 ノ 内 ヘ モ ノ 、 ウ シ ロ ヘ ヤ ル 義 ア リ	い ヤ ミ ノ 音 ミ 義 也 コ ノ 聲 ハ 物 ノ 上 ニ ハ シ ラ ネ ト 義 ヲ ハ カ ル デ イ フ 也 コ レ モ 物 ノ 内 ヘ モ ノ 、 ウ シ ロ ヘ ヤ ル 義 ア リ	い ヤ ミ ノ 音 ミ 義 也 コ ノ 聲 ハ 物 ノ 上 ニ ハ シ ラ ネ ト 義 ヲ ハ カ ル デ イ フ 也 コ レ モ 物 ノ 内 ヘ モ ノ 、 ウ シ ロ ヘ ヤ ル 義 ア リ	コレハ物ト物トノヨリツクヤウノ聲ナリサレハ二物ヲヨセツクル ヤウノ義ナリ

經にのみあるは、重音なれはまるへし。重音とは、や經には、いあればいをかね、わ經には、うあればうをかねて、いや、いいゆ、いえ、いよの聲、わ經は、うわ、うゐ、うう、うゑ、うをの聲に、や引聲をもには、畢竟、三音の合音なり。猶可考。

此外、濁音、清濁音、三聲の引各義あるへし。濁音は二物合成の義也。

文政四年辛巳十月

富士谷御杖識

と結論してゐるのである。

此結論の當否は、兎に角として、御杖は五十音圖中やわ二行に重を置いて論述してゐる事がわかるのである。此跋語の年月から見ると、著者晩年の作である。著者は、本書成功の翌々年、文政六年に五十六歳で歿したるからである。

之を要するに、本書は片々たる一枚の圖表であるが、亡父成章の此方面の所説の傳はらないのを、自己が研究して、世に示したものである。此所説は、果して其先人成章のものと同一であるか否やは、斷言出來無いが、其嗣子で、而も學統の繼承者である此人の所説は、其先人の學説を推知するに足るとおもふ。又其所説は、幼稚未熟で、今日、之を見れば首肯し難き點もあり、且、全體からいつても、左したるもので無いとはいへ、近時、其學説の聲價を昂めた富士谷派の學説の一產物として、注意を拂はねばならぬものである。

三

以上叙述した所で、本書の概要はわかつたとおもふ。在來、富士谷派の學説は、學閥の微弱、繼承者の僅少などの爲めに、學界に於ては極めて不振であつた。只、僅に、此嗣子御杖や、福田美楯、保田光則など二三の研究者があつ

たに過ぎぬ。最近、其聲價が世に認められて、漸次、其研究者が出て來た様である。誠に欣ぶべき事である。當時富士谷派と並立してゐた本居派の語學方面の學説は、其繼承者や門下にも多數の學者が輩出し、従うて、其關係著述も非常に澤山世に現はれてゐる。此語學上の圖表類も宜長の「紐鏡」以下數十種に及んでゐるのである。然るに、之に反して、富士谷派の學説で其語學方面關係の著述は、極めて少ない。其圖表類は、尙更、稀有である。自分の知る處では、此未刊寫本の「經緯略辨」の外に、刊行の上田眞具の「詞の多圖記」(弘化三年冬刊)と保田光則の「裝脚結詞打合圖」(弘化四年正月刊)との二鋪あるに過ぎぬ。僅に三鋪に止まるのである。前者は、只、單に經緯圖、即、五十音圖の略解で、後の二者は、富士谷成章の學説全般に互つての指掌圖で、其内容に、精粗詳略の大差異があるのである。前者は、無論であるが、後者二鋪も、赤堀又次郎氏の名著「國語學書目解題」にも載つてゐないし、他の國語學關係の著述にも何等見る所が無い。其稀覯本である事は知られるであらう。後者二鋪については、本篇論述の範圍外であるから、其敘述は之を避けて、他日、發表の機を俟つ事にしたが、茲には世間未知未聞の前者未刊本一鋪について、聊紹介する次第である。(昭和十年七月十八日稿)